

本居宣長『玉勝間』全訳注（一）

樋口達郎・河合一樹・宇賀神秀一

言草のすゞろにたまる玉がつま

つみてこゝろを野べのすざびに

本居宣長

序

本居宣長（一七三〇～一八〇二）。言わずと知れた国学の泰斗であり、我が国の古典研究に於いて一大画期を為した不世出の思想家である。彼の手に成る学問業績は枚挙するに遑なく、わけてもその完成に三十余年もの歳月を傾けた畢生の大著『古事記傳』は、『古事記』研究の白眉として、没後二百年以上を経た現在に於いてもなお、褪せることなき輝きを放ち続けている。

この江戸後期を代表する知の巨魁宣長の遺した著作物は膨大な

量にのぼり、筑摩書房より刊行されている『本居宣長全集』は、別巻を含め実に二十三巻を数える。そこには先に挙げた『古事記傳』のほかに、かの有名な「もののあはれ」の概念を披瀝した『紫文要領』や、古学研究のあるべき姿勢を説く『宇比山踏』など、彼の思想を代表する著作をはじめ、歌学や古典の註釈、随想録に暦や地理の考察、果ては自作の詠に至るまで、極めて多彩な作品が収録されており、それらを紐解くとき、我々はその旺盛なる学究への意欲と博覧強記とに、幾度となく瞠目を余儀なくされるのである。

かく多端なる側面を有する宣長の学問成果に対しては、当然にしてこれまでに様々な角度からの研究が為されてきた。而して、そうした宣長研究に於いて重要な役割を担い続けているのが、『玉勝間』である。その題に見える「勝間（かつま）」は、「かたま」や「かた

み」などともいい、目の堅くつまった竹籠を指す語である。多くその直上に「玉」や、あるいは「无間・無目(まなし)」といった美称を伴って用いられ、古くは記紀や萬葉にその用例を認めることができる。類稀なる情熱をもつてこれらの古典に向き合い続けた、宣長ならではの命名であるといえるだろう。

総計一〇〇〇余にも及ぶ条によって構成されるこの書物は、その冒頭に語られている「なにくれと数おほくつもりぬるを、いとくだ／＼しけれど、やりすてむもさすがにて、かきあつめむとする」という動機そのままに、宣長が折々に抱いた問題関心とそれに対する見解、数々の見聞、些細な気付きなどを纏めた謂わば覚書きの集成であり、まさしくその名に冠せられておりに、多種多様な「言草」をその内に収めた『勝間』というにふさわしい。かような性質を有する本書は、したがって、宣長思想の追究に際し、あるいはその所説を支える傍証の請求先として、またあるいは新たな視座の発出地点として、常に恰好の資料を我々に提供してくれる。

しかしながら、一方で『玉勝間』は、その性質に由縁する利便性ゆえに、往々にして副次的な扱われ方をされるくらいがある。たしかに、宣長研究の大家村岡典嗣による「玉勝間の解説」(村岡典嗣校訂『玉勝間上』所収、岩波書店、一九三四)や、大野晋の「解題」(『本居宣長全集第一巻』所収、筑摩書房、一九六八)など、

広く『玉勝間』の全般にわたる優れた解説文は存在しているが、全体として見れば、その数は本書の持つ価値に比して寡少であるといわざるを得ない。また、『日本思想大系40 本居宣長』(岩波書店、一九七八)に収録されたものには註解が施されているが、頭註という制約のもとで対象箇所が選りすぐられているためであろう、そこにはいまだ註を附す余地が残されているように思う。

而してこのことは、一見して切要な条のみを抽出して利用し、もつてその他を顧みざるが如き事態を惹起する危険性を孕んでいよう。さように分野断片的な扱いのもとに、『玉勝間』が諸研究の途上に於ける摘み食いの対象に終始してしまうようなことになることすれば、それは大いなる損失であるといわねばならない。本稿が企図するところの全訳註という研究の眼目は、まさしくこの点に於いて存している。

宣長が認めた「言草」は、凛とした美しさを放つものから、さながら可憐な色合いの花弁を擁するもの、あるいは人々の氣に留まることもないような、道端の目立たぬ野草の如き趣を呈するものまで、実に千差万別の魅力を有する。而して、これらの「言草」たちが種々に折り重なりながら、銘々にその存在を主張する宣長の「勝間」の内側は、豊饒な知の煌きに満ち満ちている。

かかる珠玉の「勝間」の蓋を開くとき、我々はそこに収められた「知識」や「思索」という名の草々の持つ瑞々しさや彩りに目を奪われることだろう。そしてまた同時に、時には伶俐に、時には穩やかに、自身を取り巻く世界へとそのまなざしを向ける宣長の、豊かな人間性に触れるのである。

凡例にも断っているように、本稿を為すにあたり、現代語訳は可能な限り平明さを期した。また、註についても、従前の註解が触れていない箇所を積極的に取り挙げている。これは、国学をはじめとして、日本思想や古典文学に馴染みのない方々に『玉勝間』の魅力を知っていただきたいという、今一つの企図あつてのことである。

宣長による国学思想は、当代に於ける註釈学の先駆を為した契沖や、宣長の師である賀茂真淵によつて蓄積された古典註釈の成果のうえに、自身による不断の研鑽と思索とを重ね続けたことで、やがて大輪の花を咲かせるに到った。無論、彼等の手によつて成し遂げられた一連の註釈業績は余りにも偉大なものであり、引き合いに出すには僭越に過ぎるというものだが、この度の私どものささやかな試みもまた、今後の日本思想研究にとり僅かなりとも資するところあるものとなれば、それはこの上ない喜びである。

樋口達郎

凡例

一、本訳注は、本居宣長『玉勝間』の各条について、現代語訳と注釈とを施すものである。

一、底本には、筑摩書房版『本居宣長全集』所収本を用いた。

一、現代語訳に当たっては、平易であることを第一とし、必ずしも逐語的な訳出にはこだわらなかった。たとえば、一文が長いものについては二つに分けて訳出するなどの措置を取った。

一、現代語訳や注釈において、特に多くの分量を必要とするものについては、別に補注を設けてその条の最後に纏めた。

一、各条の現代語訳ならびに注釈は全員で検討したものであるが、各条の下訳の担当者を主筆として扱うとともに、その名を筆責として示した。

一、『本居宣長全集』に関しては、単に「全集」と表記する。また、引用に際しては「巻数・頁数」の形で当該箇所を示した。

一、引用に際して、『日本書紀』や『万葉集』など特定の慣用がある場合にはそれに従った。

第一条 中臣壽詞〔河合〕

【本文】

中臣壽詞(1)

ナカトミノヨボト

大嘗會(2)の中臣壽詞といふ文あり、宇治左大臣賴長公(3)の台記(4)

の、康治元年の大嘗會別記に載せられたり、其文、現御神止

オホシノミカミ止

大八嶋國所知食、大倭根子天皇、我御前仁、天神、乃、壽詞、遠、

稱辭、定奉、皇久止、高天原仁神留坐、皇親、神漏岐神漏美、乃、命

遠持、天、八百萬乃神等、遠集、賜、天、皇孫尊、高天原仁事、始、天、

豐原乃瑞穗乃國、安國止平、久所知食、天都日嗣乃天都高御座

乃御坐、天、天都御膳、①長御膳乃遠御膳、千秋乃五百秋、瑞穗、平

安、安、由庭、所知食、事、依、志、奉、天降坐之後、中臣乃遠都

祖天兒屋根命、皇御孫尊乃御前、奉、仕、天忍雲根神、天乃

二上仁奉、上、神漏岐神漏美命乃前、受給、留、申、③、皇御孫尊

乃御膳、水、宇都志國乃水、④、天都水、加、立、⑤、奉、止、申、遣、⑥、

事、教、給、留、依、天忍雲根神、天乃浮雲、乘、天乃二上仁上坐

神漏岐神漏美命乃前、申、天乃玉櫛、事、依、奉、此玉櫛、遠、刺、立

自、夕、日至、朝、日照、天都詔、乃、大詔、乃、言、以、告、禮、如此、告、

麻知波弱華、⑦、由都五百、生、出、⑧、自、其、下、天、八、井、出、⑨、此

持、天、都、水、止、所、聞、食、事、依、奉、⑩、如此、奉、任、々、所、聞、食、由、庭

乃、瑞穗、遠、四國、下部等、⑪、太、兆、仁、⑫、卜、事、遠、持、奉、仕、留、⑬、悠、紀、仁

アツミノコトニヤス スキニタニハノクニノヒタミ ワイハヒサグメグ メノクノノヒトドモ
近江國野洲、主基仁丹波國氷上⑭、齋、定、⑮、物部乃人等、
酒造兒酒波粉走灰燒薪探相候⑯、稻實公等、大嘗會、齋場⑰、
持齋、齋、參來、今年十一月、中、卯日、由志理伊都志理持⑱、恐、恐、
美清、清、麻、波、利、仁、奉、仕、月、内、日、時、撰、定、⑲、獻、留、悠、紀、主、基、
黒木白木乃大御酒、大倭根子天皇、天都御膳乃長御膳、遠御膳、汁
仁、實、⑳、赤、丹、穗、㉑、所、聞、食、豐、明、仁、明、坐、㉒、天、都、神、壽、詞
遠、稱、辭、定、奉、皇、神、等、母、千、秋、五、百、秋、乃、相、嘗、㉓、相、宇、豆、乃、奉、
堅、磐、常、磐、仁、齋、奉、伊、賀、志、御、世、仁、榮、奉、利、自、康、治、元、年、始、
與、天、地、月、日、共、照、明、皇、皇、②、御、坐、事、③、本、末、不、傾、茂、槍、中、執、持
乃、奉、仕、留、中、臣、祭、主、正、四、位、上、行、神、祇、大、副、大、中、臣、朝、臣、清、親、壽、詞、
稱、辭、定、奉、久、止、申、又、申、久、天、皇、朝、廷、仁、奉、仕、留、親、王、等、王、等
諸、臣、百、官、人、等、天、下、四、方、國、乃、百、姓、諸、諸、集、侍、見、食
④、尊、食、倍、歡、食、倍、聞、食、倍、天、皇、明、庭、⑤、茂、世、仁、八、桑、枝
立、榮、奉、仕、留、留、所、聞、食、⑥、恐、恐、恐、美、美、申、給、被、久、止、申、こ
れ也、此文、ふるくめでたき事多きを、世にしれる人まれなる故
に、今寫し出せり、ところどころ文字の誤おほかるを、今は三四
本を合せ見て、たがひによきあしき中に、よしとおぼしきをえらび
てしるしつ、されど猶誤と見ゆる所々なきにあらず、なほ善本を
えて正すべき也、さて今古言を考へて、訓をも加へたるついでに、
いさゝかこの意をもとくべし、第六行なる天都御膳の遠字は、

神なるべし、明^ミは、理^リを延^ヘて良^ラ志^シといへるにて、阿^ア加^カ里^リ也、事^{コト}に
は、下^{シタ}の奉^{ツカ}仕^{マツル}といふへつゞく辭也、食^シ倍^ベはみな多^タ倍^ベと訓^ムべし、給
へといふこと也、さて聞^キ食^シの下^ヘに、弓^テといふ辭を添^ソて心得^{コト}べし、
天皇^{テウ}明^{メイ}庭^{テイ}の明^{メイ}字^ジは、朝^{アサ}の誤^ゴ也、禰^ネ所^{ショ}開^{カイ}食^シ止^トは、一本^{イツポン}には
稱^{ショウ}辭^ジ竟^{ケイ}奉^{ホウ}久^{キウ}止^トとあり、これもあしからず、さて天^{テン}忍^{ニン}雲^{ウン}神^{シン}の事、
伊^イ勢^{セイ}の外^{ガイ}宮^{ミヤ}の書^{ショ}とも^ニに、天^{テン}村^{ムラ}雲^{ウン}命^{メイ}の事として記^キせり、同^{ドウ}神^{シン}にやあ
らむ、さて此^{コノ}壽^{シウ}詞^ジを申^{マウ}すことは、辰^{チン}日^{ニツ}豐^{フウ}樂^{ラク}院^{イン}に幸^{イデシ}し、悠^{ユウ}紀^キ帳^{チャウ}に御^ミ
す、神^{カン}祇^キ官^{カン}の中^{ナカ}臣^{シン}、賢^{ケン}木^キを笏^{ソク}に執^{トリ}そへて、南^{ナン}門^{モン}より入^リ、版^{バン}位^イにつ
き跪^{ツク}て、天^{テン}神^{シン}の壽^{シウ}詞^ジを奏^{ソウ}すと、大^{ダイ}嘗^{ショウ}祭^{サイ}式^{シキ}に見^ミえたり、わすれたり、
大^{ダイ}嘗^{ショウ}會^{カイ}齋^{サイ}場^{チャウ}とある會^{カイ}字^ジは、宮^{ミヤ}を誤^ゴれるなるべし、

【現代語訳】

『中臣寿詞』について

大嘗会の際に奏上された『中臣寿詞』という文章が残っている。それは、宇治の左大臣すなわち藤原頼長公の日記である『台記』の中の、康治元年（一一四二年）の「大嘗会別記」という箇所に乗せられている。その文章は次のようなものである。

【中略（「中臣寿詞」の訳については補注を参照）】

以上が『中臣寿詞』である。この文章に残っている詞は、古くて素晴らしい点が多いのに、世間では知っている人が稀であるために、今ここに写し出した。その作業に当たって、現在この文章として残っているものには、ところどころに文字の誤りが多いので、三、四種類の本を見比べて、それぞれ良い箇所と悪い箇所がある中で、良いと思われるものを選んで書き起こした。しかし、まだ誤りであるように見える箇所がない訳ではない。さらに善本を見つけて修正するべきである。さて、古へことはを考えて、訓を加えたついでに、少々本文についても見ていこう。

①六行目の「天都御膳」の「遠」の字は、正しくは必ず「乃」であるべきである。一見「遠」でも意味が通るように感じるけれども、それではその次に「瑞穂」とあるので「遠」が重なってしまう。

②「由庭所知食」の「知」という字は、「聞」の誤りであろう。

③十行目の「天忍雲根神」の「天」は「忍」の誤りである。忍雲根神、神漏岐神漏美命、前、受給、天、乃、上、奉、上、というように「順番を変えて」言葉をつなげれば、意味がよく理解できる。

④「宇都志國水」の「了」という字は、本によって「尸」とも「加」ともあるが、全て誤りである。必ず「仁」であるべきであ

る。

⑤「天都水^{ミナト}加^カ立^{タテ}」の「立」という字は、「𠂔」を誤ったものである。

⑥「申^{ウラナヒ}」とあるのは、理解が出来ない。必ず「申^{ウラナヒ}」とあるべきところである。

⑦「麻知波弱^{マナハノ}菲^ヒ」は、どういうことであるのか解りにくい。ただし、「麻知」に関しては『延喜式神名帳』に「左京二條坐神二座、大詔戸^{オホノリド}命神、久慈眞智^{クニマコチ}命神」とあり、「眞智」には由来がありそうである。「大詔戸^{オホノリド}命」と並んでおり、またこの二神は「相嘗^{アヒセハム}」

「共に食事をする事」に与かつたことなど、下に述べることと合わせて「その意味を」考えるべきである。「菲」は、もしかすると「𠂔」を誤ったものであって、「𠂔」の借字ではなからうか。「弱^{ヤカ}𠂔」とは、「正午時^{マユル}」より前をいうものであらうから、上に「至朝日照^{ルニ}」とある箇所^{ルニ}の続きの時刻であらう。

⑧「由都^{ユツ}五百」といふ言方は、同じ言葉が重なっているのだからどうか。「由都^{ユツ}」はすなわち「五百箇^{イハツ}」ということだからである。

⑨「八井^{ヒツ}は、神武天皇の御子に名前が、「日子八井^{ヒコヤハノ}命」また「神八井耳^{カムヤサミミノ}命」といふ方がいらつしやるが、その「八井」と意味が同じなのであらうか。

⑩「如此奉^{ヒツ}」という箇所は、「奉」の上に「依^ヨ」の字があつたの

が脱落したのであらう。

⑪「四國^{ヨロクニ}卜部^{ウラベ}」については、『大祓詞』の終りに、「四^モ國^モ卜部^{ウラベ}等」とあるけれども、「卜部」という言葉は、伊豆耆岐対馬の三つの国のみで出ることであつて、四方（あちらこちら）の国より出るものではないので、「毛」の字は、後の時代の人が利口ぶつて余計なものを加えたのであつて、それもこれも四つの国という意味である。それにしても、四つの国は、右の三つの国と、後の一つの国はどの国であらうか。不思議である。

⑫「太兆^{タシホ}」の「仁」という字は、「乃^ノ」を誤ったものである。

⑬「奉仕^{ホウジ}」の「留^ル」という字は、「𠂔」であらう。

⑭「氷上」といふ箇所^{ルニ}の下に、一つの本には「郡」の字がある、もしそれに依るならば、上にある「野洲」といふ箇所^{ルニ}の下にも、その字があるべきである。

⑮「相候^{アイヒツク}」は、『儀式』には「相仕^{アイヒツク}」、『大嘗祭式』には「共作^{アイヒツク}」とあり、これらを合せて考えると、「仕^シ」も「候^{コウ}」も誤りであつて、「相作^{アイヒツク}」であらう。

⑯「由志理伊都志理^{ユシリイデシリ}」は、「由^ユは「齋^ユ」ということであり、「伊都^{イツ}」は「嚴^{イツ}」ということであつて、共につつしんで清浄になることである。「志理^{シリ}」は、「齋^ユまはり」「清^ユまはり」の、「まはり」のよな言葉であると思われる。

⑰「日時ニシ撰定」という箇所に関して、「日時」いつも定まっている事であるのに、このように申し上げるのは、上代には、その度

ごとに「日時」を選んで定めていたのではなからうか。そして、その時代の詞のまま、後の時代でも申し上げていたのだろうか。

⑱「赤丹カニ穂ホ」の「毛」の字は誤りである。後の時代の人が、この言葉の意味をしらずに、ただ上に二つ「仁毛ニモ」とあるのに習って、みだりにここにも付け加えたものであろう。

⑲「明御座ミミ」という箇所の「ミ」は、必ず「止ト」とあるべきところである。

⑳「相嘗アヒニヘ」は、「阿比爾閑アヒニヘ」と発音するべきである。「爾閑ニヘ」を「牟倍ムベ」と発音するのは、後の時代の音便によって崩れた発音である。「大嘗オホニヘ」も、「大爾閑オホニヘ」であるのを、「大牟倍オホムベ」というのと同じである。

さて、この「相嘗アヒニヘ」は、天皇と「相伴アヒトセ」に、「新餐ニヘ」し奉るといふ意味の名称であつて、俗にいう「相伴シヤハセン」のことである。それ

故に、この祭は、必ずしも神社の「社格」の尊卑にも関係なく、必ず「相伴」に預るべきであるように思われる神の中にも、預らないものが多い。これには、特別な理由が有つて、預る神は預る

ものなのであろう。相伴に預る神は七十一座いらつちやつて、『四時祭式』に確認できる。その中に、上に述べた「左京ニス二座

神」は、『延喜式神名帳』においては「大社」の一覧の中にすら

入っていないのに、この祭には預かつているということは、新嘗に関して特別な関係のある神なのであろう。

㉑「明ミ」は、「理リ」を伸ばして「良志ラジ」と言っているものであつて、「阿加里アカリ」と言つことである。

㉒「事コトニ」は、下の「奉仕ツカヘツツタ」という箇所へ続く言葉である。

㉓「食シ」については、すべて「多倍タベ」と読むべきである。すなわち「給へ」ということである。そして、「聞食キキツベ」の下に、「ミ」という言葉を添えて理解すべきである。

㉔「天皇明庭」の「明」という字は、「朝」の誤りである。

㉕「禱イハヒ所開食シ」という箇所は、ある一つの本には「稱辭シクヘコトヲヘヤツツラ竟奉キツト」とあるが、それでも悪くはない。

さて、「天忍雲神アメノクモノカミ」の事については、伊勢の外宮の書に、「天村雲命アメノムラカミ」の事として記されている。同じ神ではなからうか。

さて、この「壽詞ユサヒゴト」を申し上げることについては、「辰日タチノヒ」に「豊樂院トヨガク」に幸し、悠紀帳ユキチヨに御す、神祇官サカキの中臣、賢木サカキを笏ソコに執トリそへて、南門より入つて、版位イタビについて跪ツいて、天神の壽詞ユサヒゴトを奏ソウすといふように、『大嘗祭式』にある。

言及するのを忘れていたが、㉖「大嘗會オホニヘ齋場イハヒ」とある「會」の字は、「宮」を誤つたのであろう。

【注釈】

- (1) 「壽詞」もしくは「寿詞」は、祭祀の際に唱えられる「祝詞」の中でも祝賀の意味の強いものを指す。「祝詞」の多くは九世紀に編纂された『延喜式』の八巻に収められているが、ここで登場する『中臣壽詞』はその中に含まれず、本文にもあるように『台記』（本条注(4)参照）の中に残されて伝わったものである。中臣氏が代々奏上していたことによる名称。別称として「天神壽詞」ということもある。
- (2) 「大嘗會」は「大嘗祭」ともいう。日本の古くからの儀式で、毎年穀物の収穫を祝うのが「新嘗祭」であるが、天皇が即位して最初のを特に「大嘗祭」と呼ぶ。
- (3) 藤原頼長（一一二〇―一一五六）。藤原忠実の子で、藤原道長から数えて四代目の子孫にあたる。一一四九年に当時の朝廷の最高位である左大臣に就任した。また、「悪左府」という名でも知られる。
- (4) 頼長の日記。当時の風俗を知る上で貴重な資料である。男色の記事が多いことでも知られる。
- (5) このように「ふるくめでたき」と並べられることは、古代の日本語を神聖視する宣長の考えに基づく。
- (6) 全集十三巻に収められる『本居宣長随筆』のうち「石上助識篇」

と名付けられるものに、『中臣寿詞』の校訂作業の様子が見られる（二三・四〇三）。

- (7) 「神名帳」は、『延喜式』の巻九及び巻十に収められたもので、全国の官社の一覧である。

- (8) 『大祓詞』は、『延喜式』の八巻に「六月晦大祓」として収められる祝詞であり、『中臣祓』の別称もある。宣長は、これについて『大祓詞後釈』を著しており全集七巻に収められている。

- (9) 「儀式」は律令制の朝廷における公務や宮中の行事などに関する礼儀作法であり、またそれをまとめた書物のことである。書名として『儀式』という際には九世紀前半に編纂された『貞観儀式』を指す。

- (10) 「大嘗祭式」は、『延喜式』の巻七に「踐祚大嘗祭」として収められている。

- (11) 「四時祭式」は、『延喜式』の巻一及び巻二に収められている。

- (12) 『豊受皇太神御鎮座紀』（神道大系『伊勢神道 上』、神道大系編纂会、一九九三年所収）に『中臣寿詞』と類似した文章があり、「天村雲命」の名前が見える。

【補注】

※『中臣寿詞』について

【現代語訳】

今の世に明らかに現れておられる神⁽¹⁾として日本を支配されている今上天皇⁽²⁾陛下の御前に天つ神からの寿詞「お祝いの詞」を中臣が代わって奏上申し上げます。

「高天原⁽³⁾にお鎮まりになっておられる天皇の祖先であるカムロギ・カムロミ（イザナギ・イザナミ）の命が、八百萬の多くの神々をお集めになって次のような詔を為されました。『皇御孫尊は、高天原において、（国）の居るめ、豊葦原の瑞穂国⁽⁴⁾を平和な国として治めて、日嗣の御子（天皇）⁽⁵⁾の居るべき天つ高恩座に君臨して、天つ神から頂いた御膳の長御膳の遠御膳として、長く久しく食べるべき瑞穂（稲）を、平和なうちに斎庭（清浄で神聖な場所）において食べるように』。そのように委任されたことによつて、（皇孫尊はやがて）天降られました。その後、中臣氏の遠い祖先に当たる天兒屋根命⁽⁶⁾は、皇孫尊の御前にお仕え申し上げました。そして、（自分の子の）天忍雲根神を高天原の二上（の山）⁽⁷⁾に登らせて、カムロギ・カムロミの命の前に、（指示を頂くために申し上げる言葉として）『皇孫尊に奉る御膳の水は、宇都志国⁽⁸⁾の水に天つ国⁽⁹⁾の水を加えて奉りましょうか』と申せと言ひ教えました。そこで天忍雲根神が天の浮船⁽¹⁰⁾に乗つて、高天原の二上によつて、カムロギ・カムロミの前でこのことを申し上げると、「神は」天の玉櫛⁽¹¹⁾をおさすけになられて、『この玉櫛を地に刺し立てて、夕日の照り傾く頃から朝日の照り昇る頃まで、天津祝詞大祝詞事⁽¹²⁾を用いて告り申しなさい。このように告り申したなら

ば、前兆として昼前に無数の竹の群れが生え出るでしょう。その竹の下から天の八井（天つ水が湧く井戸）が出現するでしょうから、その水をもって、天つ水として（皇孫尊は）召し上がりなさい」と仰つて（玉櫛を）授けられました。そのようにして（カムロギ・カムロミ）がお授けになったことに従つて、（代々の天皇が）お召し上がりになる稲穂を（奉るべきところとして）、四万国のト部たち⁽¹³⁾が太兆⁽¹⁴⁾の占いをもつて、「大嘗のことを」奉る地として悠紀に近江国の野洲群船⁽¹⁵⁾を、主基に丹波国の水群⁽¹⁶⁾を選びました。そして、物部の人々⁽¹⁷⁾として、酒造児⁽¹⁸⁾・酒波⁽¹⁹⁾・粉走⁽²⁰⁾・灰焼⁽²¹⁾・薪採⁽²²⁾・相作⁽²³⁾・稲実公⁽²⁴⁾などが、稲穂を大嘗の斎庭に持ち運んで参りまして、今年の十一月の中の卯の日に忌忌しく厳しく齋み清めた（御酒・御膳の）料を持って、恐れ慎み懇ろに忌み清めて仕え奉り、「この」月の中に日時を選び定めて、献るところの悠紀・主基の黒酒・白酒⁽²⁵⁾の大御酒を、大倭根子天皇が天つ神から授けられました遠く久しく永遠に召し上がられる御膳として、お酒としても（飯としても）召し上がられ、顔の色艶も赤々と輝くばかりに召し上がられ、豊明りに明らかになされ、「また、この」寿詞を尽くして申し上げる神々にも、末長く大嘗の相伴に一緒に召し上がられ、堅磐のように堅く、常磐のように永久不変に禍いなくお守りいただきまして、盛大な御世として栄えさせていただきますようにと申し上げ、康治元年から始まりまして、天地月日とともに永く久しく、「皇御孫尊が」光り輝行れるようになるこの神事に、「（皇神たちと皇御孫尊との）中を執り持つ（間にたつてお仕えする）中臣の祭主の正四つの位の上⁽²⁶⁾にして神祇の大副⁽²⁷⁾を行う大中臣⁽²⁸⁾の朝臣清親が、寿詞を言葉を称え尽くして奏上申し上げる次第でございます」と申し上げます。

【注釈】

- (1) 現御神・天皇は、現にあらわれている神であるという思想に基づく。
- (2) 大倭根子天皇・天皇の美称。「根」は助詞であり、「子」は愛称である。
- (3) 高天原・日本神話において、神々のいる天上の世界。
- (4) 豊葦原瑞穗国・「高天原」に対して地上の日本国を指す。
- (5) 日嗣御子・皇統を継ぐものを指し、皇太子の意味もあるが、ここでは新たに即位した天皇を指す。
- (6) 天児屋根命・天孫降臨の際にホノニギの命に随伴した神で、『古事記』では中臣氏の祖先であるとされている。
- (7) 二上・高天原にある二峰並立の山で、カムロキカムロミの御座所である。
- (8) 宇都志国・「豊葦原瑞穗国」と同じく地上の日本国を指す。
- (9) 天都水・天つ国すなわち高天原の水。
- (10) 天乃浮雲・空に漂う浮雲。
- (11) 天乃玉櫛・「玉櫛」の美称。現在では「玉串」と書くことが一般的で、神の枝に麻などをつけたもの。
- (12) 天津祝詞太祝詞事・「祝詞」の美称。
- (13) 四國卜部等・「卜部」は占いをする人々。四つの国から出るとされるが、本文中にある宣長の説に従えば、伊豆・老岐・対馬がそのうちの三国であり、後の一国は不明。
- (14) 太兆・古代の占いごとで、最初は鹿の肩骨を焼く方法であったが、後に亀の甲を焼く方法に変わった。
- (15) 悠紀上・近江國野洲・かつて滋賀県に野洲郡があった。現在の野洲市全域と守山市・近江八幡市の一部にあたる。
- (16) 主基下・丹波國氷上・かつて兵庫県に氷上郡があった。現在の丹波市にあたる。
- (17) 物部・新穀を出す田の耕作に従事する人々。
- (18) 酒造児・酒を造る女子。
- (19) 酒波・酒を造る手つだいの女。
- (20) 粉走・粉をふるう役の女。
- (21) 灰焼・酒に混ぜるための灰を作る役の男。
- (22) 薪採・薪を取る役の男。
- (23) 相作・酒を造る下ばたらきの女。
- (24) 稲実公・飯のための稲の穂をぬく役の男。
- (25) 黒木白木乃大御酒・白黒は酒の種類で、白は普通の酒、黒は灰をまぜて造った酒である。
- (26) 正四位上・当時の律令制の階位で、一位から八位まであり、その中にさらに正従や上下の区別があった。
- (27) 神祇大副・神事を司る神祇官の中で第一番目の役。
- (28) 大中臣・中臣氏の中で、神事に奉仕するものを指す。

第二条 大安殿〔宇賀神〕

【本文】

大安殿

天武紀に、天皇御大安殿ニ云々といへること⁽¹⁾、所々に見え、續紀にも多く見えたり、大安殿は、意富夜須美杼能と訓べし⁽²⁾、すなはち大極殿のこと也、又天智紀に、西安殿、天武紀に、向安殿、内安殿、外安殿、舊宮安殿⁽³⁾、文武紀に、東安殿などもある、みなやすみどの也、やすみは、古き歌に、やすみしわが大ききとよみて、これ安^{ヤス}らけて天の下を見し給ふ意、見し給ふとは、しろしめすこと也⁽⁴⁾、されば天皇のまします殿をば皆、やすみどのと申せる也、いたく後の物なれど、西行が撰集抄に、崇徳天皇の御陵に参りて、その御事を申せる所に、清涼紫宸の間にやすみし給ひて、百官にいつかれさせ給ひ云々といへるは⁽⁵⁾、たま／＼古言の残れりしなるべし、さて皇極紀天武紀に、大極殿を、おほあむどのと訓⁽⁶⁾、天智紀に、西小殿とあるを、にしのこあどのとよみ、上に出せる天武紀の内安殿を、うちのあむどのと訓るなどは、何れもやすみどのと訓しめむために、傍^{カサハラ}に安下ノと書たるを見て、誤りて安を音によめるひがこと也、又かたはらに晏字を書る所もある、これもかの安を音によむこととひが心得して、あむと訓しめむとて也、大極殿は、第一の正殿なるが故に、おほやすみどのと云るを、やがて大安

殿とも書れたる也、續紀に、大極殿と大安殿とは、別なるが如く聞ゆる所もあれど然らず、同じこと也、

【現代語訳】

大安殿

『日本書紀』天武紀において、「天皇大安殿に御する等々」と述べているのは、その端々に見られ、『続日本紀』でも多く見られる。大安殿とは、意富夜須美杼能と読むべきであり、すなわち大極殿のことである。また『日本書紀』天智紀には「西の安殿」とあり、同書天武紀には「向の安殿」「内の安殿」「外の安殿」「旧宮の安殿」とあり、『続日本紀』文武紀に「東の安殿」などとあるのも、おしなべて「やすみどの」のことを申し上げている。「やすみ」とは、万葉の歌に、「やすみしわが大きき」と詠まれており、これは「安らけて」「穏やかに」天下を見し給ふ「統治される」という意味である。「見し給ふ」とは、統治されることである。そうであれば天皇の居らっしゃる殿というのはすべて、「やすみどの」のことを申ししている。いたく後世の資料であるが、西行の『撰集抄』において、崇徳天皇の御陵に参拝した際、天皇の御事について「清涼殿と紫宸殿の間で安らかに統治されており、百官をかしづかれて等々」と申し上げているのは、偶々、古の言葉が残っていたのであろう。

さて、『日本書紀』皇極紀と天武紀では、「大極殿」について、「お
おあむどの」と読み、天智紀では、「西小殿」とあるのを、「にしの
こあどの」と読み、上述の天武紀の「内の安殿」を、「うちのあむ
どの」と読む例などは、何れも「やすみどの」と読ませるために、
傍らに「安ドノ」と記しているのに、誤って「安」の字音で読んで
しまった勘違いである。傍らに「晏」の字を記している箇所もあり、
これも先の「安」の字と同様に読むものと誤認して、「あむ」で読
んでしまったのである。大極殿は、第一の正殿であるために、「お
ほやすみどの」というのが、やがて大安殿とも記されるようになって
た。『続日本紀』における「大極殿」と「大安殿」とは、異なつて
いるかのように思われる箇所もあるが、その実、同じなのである。

【注釈】

(1) 「天皇御大安殿」は、『日本書紀』天武紀十四年九月条に「辛酉。天皇 大安殿に御して、王卿等を殿前に喚して、博戯せしむ」とみられる。また日本古典文学全集『日本書紀』（小学館、一九九四年）では「大安殿」に注して、「書記の古訓に「大極殿」をオホアムトノとあることなどより大安殿と大極殿は同一とする説と、大安殿は内裏正殿で、後の紫宸殿に相当する説とがある」と説明している。併せて、本条注(6)を参照。

(2) 「大安殿」に「意富夜須美舒能（オホヤスミドノ）」という仮名を当てている点について、参考までに『古事記傳』の「假字の事」（九・二〇～三二）の各字音を挙げておく。

①オ 淤意隱 ②ホ 富本菩番蕃品 ③ヤ 夜也 ④ス 須州周 ⑤ミ 美微彌味 ⑥ド 度騰騰 ⑦ノ 能乃

(3) 『日本書紀』の「殿」の用例は、天武紀十年春正月条に纏ま
ってみることが出来、そこでは「丁丑。天皇、向小殿に御し
て宴したまふ。是の日、親王・諸王を内安殿に引き入れ、諸
臣は皆外安殿に侍る、共に置酒して樂を賜う」とみられる。
(4) 『万葉集』卷一の三十六番歌に「やすみししわが大君のき
こしめす 天の下に 国はしも……」と詠じられており、三十
八番歌では「やすみししわが大君 神ながら 神さびせすと
吉野川 たぎつ河内に」と詠じられている。

(5) 西行『撰集抄』第一の「七 新院の御墓白峯の事」に「まの
あたり見奉り事ぞかし。清涼紫宸の間にやすみし給いて、百
官にいつかれさせ給ひ、後宮後房の代には、三千の翡翠のか
んざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみ、しあわ
せ給ひしぞかし」（小島孝之・浅見和彦『撰集抄』桜楓社、
一九八五年、二八～三二頁）とみられる。

(6) 『日本書紀』天武紀十年二月条に「大極殿」とあり、日本古

典文学全集『日本書紀』注では、皇極紀四年六月条の例に疑義を唱えて、「皇極期に「大極殿」の名称があつたかは疑問で、本条が確かな初出例と考えられる。大極殿は書紀古訓オホアムトノとあり、内裏正殿の大安殿がその前身であつたのではないか。朝堂の正殿となり、天皇がここで政務を執り、儀式を主催し、「大極殿」と称するようになったのである」と説明している。

(ひぐち・たつろう 筑波大学人文社会系

特任研究員

かわい・かずき 筑波大学大学院

人文社会科学研究所

うがじん・しゅういち 筑波大学大学院

人文社会科学研究所)